



# Japanese Association of Supportive Care in Cancer

日本がんサポーターケア学会 ニュースレター

News Letter **No. 3**

2018.11

一般社団法人 日本がんサポーターケア学会

Tel: 092-406-4166 Fax: 092-406-8356

Email: jascc@jascc.jp URL: <http://www.jascc.jp>

## 目次

### 新理事からのあいさつ

中島 貴子 (聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学講座) -----	2
内富 庸介 (国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院支持療法開発部門) -----	2
加賀美 芳和 (昭和大学医学部放射線医学講座) -----	3
大崎 昭彦 (埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科) -----	3
宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学 腫瘍センター) -----	3

### 新規ワーキンググループ設立

#### Onco-nephrology WG

堀之内 秀仁 (国立がん研究センター中央病院 呼吸器内科) -----	4
-------------------------------------	---

#### Onco-cardiology WG

向井 幹夫 (大阪国際がんセンター 循環器内科) -----	4
--------------------------------	---

### 日本がんサポーターケア学会に期待すること

桜井なおみ (一般社団法人 CSR プロジェクト) -----	5
---------------------------------	---

### JASCC seminar 2018 in Vienna 報告

佐伯 俊昭 (埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科) -----	6
------------------------------------	---

### 第4回学術集会回学術集会

佐藤 温 (第4回学術集会会長) -----	7
------------------------	---

### 第3回学術集会を終えて

田村和夫 (第3回学術集会会長) -----	8
------------------------	---

### 第3回学術集会事務局より

伊藤 敬美 (第3回日本がんサポーターケア学会学術集会 事務局長) -----	9
---	---

### 編集後記 (広報・渉外委員会 委員長)

宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学 腫瘍センター) -----	9
--------------------------------	---

## 新理事からのあいさつ

## 真の個別化医療は支持療法にあり！

中島 貴子（聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学講座）

平成 30 年日本がんサポーターブケア学会総会にて理事を拝命いたしました。

本邦でもがんに対するゲノム医療が推進され、精密医療が少しずつ現実のものとなってきています。治療の選択がゲノム情報によって精密に行われるようになる一方で、治療の有効性を最大限に引き出すには支持療法が必須であり、それは個別化されたものでなければなりません。患者個々の年齢やパフォーマンスステータス、合併症などの患者背景だけでなく、個人の価値観や人生観によっても選択されるものであり、さらに近未来ではゲノム情報に基づく選択もでてくるかもしれません。

また薬物療法におけるドラッグ・ラグがだいぶ解消されてきたことは、本邦の治療開発の実力が世界に追いついたことを意味します。しかし支持療法の開発については、まだ日本が世界に遅れている部分でもあります。ここ日本がんサポーターブケア学会から、このリサーチラグを埋めていきたいと考えております。本邦から質の高い標準支持療法を創出し、個人、社会、時代から要求されているがん医療の実践に貢献していきたいと考えております。今後とも、なお一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 内富 庸介（国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院支持療法開発部門）

真摯に学会の発展を考え、汗を流したいと思えます。宜しく願い申し上げます。

支持療法の標準化に向けての研究、ガイドライン作りは各研究部会により急ピッチで軌道に乗ってきていると思えます。そして、今こそ世界をリードする学術活動が JASCC に求められていると感じています。基礎研究や観察研究から検証的研究、そしてガイドライン発行後の普及実装科学研究～サーベイランスまでの体制が少し不十分といえますので、ガイドライン委員長として各部会に関わらせて頂き、ニーズに応じて研究体制の構築に寄与したいと思えます。

2020 年 6 月 19 日・20 日（京都）に開催予定の日本緩和医療学会、日本サイコオンコロジー学会との合同学術大会は、相互の立ち位置を再確認し、コラボレーションできる機会になればと思えます。透明な運営を通して、個々の利害に陥ることなく成果の最大化につなげ、全国の患者・家族のために汗を流すことを惜しまず、合同大会の成功、学会の発展に貢献したいと思えます。ご指導の程よろしくお願い申し上げます。



### 加賀美 芳和 (昭和大学 医学部放射線医学講座放射線治療学部門)

2018年8月第3回学術集会時に皆さまにより理事に承認いただきました。

理事としての役割は新規医療情報委員会の委員長です。委員の関根郁夫先生、小茂田昌代先生と共に学会員の皆様に最新のがんサポーターティブケアに関する情報をお伝えできればと思っています。

現在は総合病院である昭和大学病院に勤務していますが、それまでは国立がん研究センター中央病院などの主ながん専門病院の放射線治療医としてキャリアを積んできました。80年代からがん治療に関わってきた者からみるとこの40年で我が国でのがん治療への考え方は大きく変わったと思います。80年代は拡大手術の勢いがまだある時代で治療の根治性が大きなテーマでした。90年代の「がん告知」の議論を経てQOL、緩和ケアなどが語られ、疾患あるいは治療によって患者さんにもたらされる様々な問題についての議論も重要な論点になってきました。日本がんサポーターティブケア学会設立は必然でありその活動はがん治療の方向性に大きく影響してくるものと思います。理事としては多くの患者さんに利益が得られるよう、学会の活発な活動に寄与していきたいと思っています。

### 大崎 昭彦 (埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科)

この度、平成30年9月1日付けで日本がんサポーターティブケア学会理事を拝命いたしました。本稿で会員の方々にご報告する機会を頂きましたのでご挨拶申し上げます。私は昭和61年広島大学医学部卒業後、直ちに広島大学原爆放射線医学研究所外科に入局しました。長らく住んでおりました広島を離れ、ここ埼玉へは平成18年6月に埼玉医科大学乳腺腫瘍科助教授として赴任して参りました。現在は埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科教授を勤めております。私の専門は乳腺外科で、診療の中心は手術、術前術後の薬物療法ですが、多くの乳癌患者さんに接するなかでがんサポーターティブケアの重要性は日々肌で感じております。本学会はこれから会員も増え大いに発展していくpromisingな学会です。私がこれまで培ってきたがん診療の経験が微力ながら本学会のお役にたてればと考えております。理事として会員の方々に信頼して頂けるよう精進して参る所存ですのでご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

### 宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学 腫瘍センター)

この度、新理事に就任いたしました東京慈恵会医科大学の宇和川匡です。私は消化器外科、中でも肝胆膵外科が専門ですが、最近はmedical oncologistとして活動しています。JASCCでは、総務の広報小委員会（現在は広報渉外委員会）、神経障害部会で関わらせていただき、第一回学術集会（相羽恵介会長）の事務局も担当させていただきました。科学的根拠に基づいた支持療法を追求するJASCCは新しい学会ではありますが、アクティビティは非常に高く、すでに各部会では活発な研究が多くなされ、社会にその成果が発信されています。私はJASCCを通して正しい支持療法に関する知識や情報を社会に発信するお手伝いをさせていただきます。そのためには各部会員の方々には色々とお世話になることがあるかと思っています。微力ではございますが、JASCCをサポートしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 新規ワーキンググループ設立

### Onco-Nephrology WG

### 堀之内 秀仁 (国立がん研究センター中央病院 呼吸器内科)

2017年に、佐伯俊昭会長のもと開催されました第2回学術集会より、Onco-Nephrology ワーキンググループが活動を開始しております。本WGはOncology emergency (OE) 部会のもとに設置され、腎障害のあるがん患者のがん治療ならびにがん治療に伴う腎障害について研究・教育・診療・広報活動を実施することを目的として活動しております。現在のメンバーは、堀之内、辻靖先生、佐藤康史先生、高橋雅信先生、松本光史先生、吉富亮太先生、松原雄先生、近藤千紘先生であり、オンコロジー領域とネフロロジー領域のスペシャリストがチームを構成しWGの運営にあっております。田村和夫会長のもと開催されました第3回学術集会でもWGのミーティングならびに症例検討のセッションを担当いたしました。特に筑波大学の関根先生と堀之内が座長を務めささえていただいた症例検討のセッションでは近藤先生に腎機能障害を有する進行癌患者における薬物療法と透析適応をテーマに症例提示いただき、松原先生に適格なコメントもあって、多数の皆様を活発なご討議をいただきました。まだ発足して日の浅いWGではございますが、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

### Onco-Cardiology WG

### 向井 幹夫 (大阪国際がんセンター 成人病ドック科)

第2回日本がんサポーターティブケア学会学術集会において、Oncology emergency 部会の下部組織としてOnco-Cardiology (腫瘍循環器学) ワーキングによる活動が開始した。本ワーキングの目的は、Oncology emergency 領域において心血管障害を有するがん患者のがん診療ならびにがん治療に伴う心血管障害において研究・教育・診療・広報活動を実施することである。今までは、がんと循環器にまたがる領域はほとんどアプローチされていない領域であったが、腫瘍専門医と循環器専門医の両者が協力し「腫瘍循環器学」領域をとりあげることで、従来にない見地から新しい知見が得られるものと期待されている。第3回日本がんサポーターティブケア学会学術集会では、教育企画として「がん凝固異常」、症例検討会「Onco-Cardiology」を開催し好評であった。今後は、日本腫瘍循環器学会とのジョイントシンポジウムなどの企画を実行していく予定である。





## 日本がんサポーターティヴケア学会に期待すること

## 一般社団法人CSRプロジェクト代表理事 桜井 なおみ

2016年から転移性乳がんの国際連携組織である mBC アライアンスのメンバーとともに乳がん治療のこれまでの10年間の歩みを振り返った「Global analysis of advanced/metastatic breast cancer: Decade report(2005e2015); Fatima Cardoso, The Breast 39(2018)131-138」を発表しました。この研究で私たちは、患者のQOLに関わる132本の既往論文をレビューし、転移性乳がん患者のEQ5Dのスコアを解析しました。

解析を始める際、私たちは「この10年間で患者のQOLは当然あがっているだろう」と思っていました。ところが、2004年の数値が0.7201であったのに対し、2012年では0.6313へ下がっていることが分かりました。この10年間で様々な新薬が登場、OSも伸びています。当然、QOLも上がっているだろうと思いましたが、結果は全く違ったのです。

一体なぜでしょうか？

論文に携わったメンバーも、この点に関しては議論を行いました。「解析が間違っている？」、「なぜこんな結果になった？」。私たちの結論は、「サポーターティヴ・ケアが行き届いていないのでは？」ということになりました。

薬剤にはメリットとデメリットがあります。デメリットを最小化するために必要なのが、サポーターティヴ・ケアです。しかしながら、卒後に、これを体系的に学ぶ機会は少なく、医療者による技量差は非常に大きいのが現状です。この課題は、私たち患者会も、相談支援の中で感じるところです。

今後も免疫療法など様々な新薬が登場してきます。今まで想定しなかったような副作用にも遭遇してくるでしょう。治療継続には、そして、患者のWellbeingには、サポーターティヴ・ケアが欠かせなくなっているのです。

「ツライ、シンドイ」と言えない患者もたくさんいます。今、身体に起きている現象が副作用と認識していない患者もいます。見えない副作用や言語化しにくい副作用もたくさんあります。サポーターティヴ・ケアは待つのではなく、拾い上げをしていくことが肝心です。そして、患者も、自分の身体におきる変化を観察し、伝えていく「治療同盟としての協働作業」が求められます。

2018年9月の学術集会には多くの医師、看護師、薬剤師、患者や家族など、様々な医療に関わるステークホルダーが集まりました。本学会においては、ガイドラインの作成に留まらず、こうした身体的、精神的、そして、社会的な副作用に関して患者を交えた対話と新たな手法の開発、発生原因を科学的に探究し、「副作用は仕方がない」ではなく、「Treatable（扱える）」なものに、そして、それを均てん化していくことを期待しています。



## JASCC seminar 2018 in Vienna 報告

佐伯 俊昭 (埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科)

## 2018 年 MASCC/ISOO の目玉

2018 年 6 月 28-30 日オーストリアのウィーンで開催された MASCC/ISOO に参加したので会議の様子をお知らせします。今回の目玉は、JASCC/MASCC joint symposium であり、3 人の演者のうち静岡県立がんセンター呼吸器内科の内藤立暁先生がシンポジストとして Session 09: JASCC/MASCC Joint Session - The Evolving Approach to Management of Cancer-Cachexia Syndrome にて素晴らしい発表をされました。

内容は、悪液質とがんリハビリテーションに関する前向き介入試験 (NEXTAC 試験) の結果です。現在、AMED の支援で第 3 相試験が行われているとの情報から多くの参加者から注目を浴びていました。JASCC/MASCC の共同シンポジウムは 2019 年のサンフランシスコで開催される MASCC においても企画されています。JASCC 会員の皆さまをはじめ多くの方々の参加を期待しています。

また、お昼時には日本人研究者の MASCC 参加者を対象にランチョンセミナーが開催されました。会員、非会員問わず、支持医療に従事する医療スタッフの集いの場となったことは非常に有意義であり、楽しい時間を過ごせました。今後是非とも継続して行けることを願っています。JASCC の会員の皆さまも是非 MASCC に参加いただき、JASCC の活動が世界基準であることを感じてください。勿論、国内においても十分ハイレベルの研究は可能ですが、時には世界の空気も味って見ることも楽しいと思います。



## 第3回学術集会を終えて

## 第4回学術集会 会長 佐藤 温（弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座）

第3回学術集会は、田村会長が掲げた「がん治療と支持・緩和医療の統合を目指して」のテーマの通り、エビデンスに基づいた支持・緩和医療のすばらしい研究発表が並び、今後のがん治療研究の進歩になくはならない研究領域であることが見事に認識された学術集会でした。サポータティブケアが「支持療法」ではなく、「支持医療」として理解されていくことで、今後のこの領域の進むべき方向性がより明確になったと思います。学術集会としては、まだ生まれたばかりではありますが、MASCC との協働で世界とつながり、これまで支持医療の研究をしてきた研究者らが活躍されることで一気に、がん医療の研究としてなくてはならないものと認知される領域となりました。この勢いの中、第4回学術集会の会長としての責務の大きさを身に染みて強く感じております。

第1回の相羽恵介先生（前東京慈恵会医科大学内科学講座 腫瘍・血液内科教授）、第2回の佐伯俊昭先生（埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科教授）、そして第3回の田村和夫先生（福岡大学医学部総合医学研究センター/日本がんサポータティブケア学会理事長）と、本学会の発起人の先生方から受け継ぐ形となります。会期は、2019年9月6日(金)~7日(土)の2日間、青森市のリンクステーションホール青森で開催いたします。新しい年号になっての元年の会にふさわしいものとなるように、学術企画・教育委員の先生方やプログラム委員の先生方らと共に一生懸命に創り上げております。テーマは「がん医療を支えるキュアとケア」と題して、本来あるべき医療の構造から顧みることによって将来の医療を考えて行きたいと思います。

初秋の青森は、気候的にも過ごしやすく、そして美味しい食べ物が豊富な季節でもあります。第3回学術集会と同様、多くの方々のご参加をお待ちしております。

第4回 The 4th Annual Meeting of the Japanese Association of Supportive Care in Cancer  
**日本がんサポータティブケア学会学術集会**  
**JASCC**  
 がん医療を支えるキュアとケア  
 ~より豊かな成熟社会をめざして~

演題募集期間 2019年 **2/20**(水)~**4/30**(火) 15:00  
 学術集会ホームページ <https://www.jascc2019.org>

会期 2019年 **9/6**(金)~**7**(土)  
 会場 リンクステーションホール青森(青森市文化会館)  
 会長 佐藤 温 弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学 教授

学術集会事務局 弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座 <http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/en oncology/>  
 学術集会運営事務局 株式会社インターナショナル・ソリューション(株) 国分 隆夫 代表 理事  
 〒150-0044 東京都渋谷区松涛1-20-4 松涛六番館4階 TEL: 03-5489-4910 FAX: 03-3401-8181 E-Mail: [jascc2019@inter-plan.co.jp](mailto:jascc2019@inter-plan.co.jp)

## 学術集会を終えて、みなさまに感謝

挨拶

### 第3回学術集会 会長 田村 和夫（福岡大学医学部総合医学研究センター）

日本がんサポーターブケア学会（JASCC）第3回学術集会を2018年8月31日～9月1日に福岡国際会議場で開催しましたところ、1000名を超える参加者を得て、成功裡に終えることができました。学会員ならびに関係各位に感謝もうしあげます。集会が終了し、ほぼ決算もできましたので、集会を振り返りながら総括をしたいと思います。

#### 1. 学術集会運営について

まだ、第3回目の学術集会で集会運営に確固とした流れができてないことや予算の関係もあって、学会運営専門の会社と相談しながら実施しましたが、ファシリテーターや司会の方にはセッション進行の際にはいろいろ手伝っていただいたところもあり、ご迷惑をかけたと思います。一方、少し年配の先生方には、1970-80年代、学会は大学の教室が総動員されて「手作り」でやっていたことを思い出されたのではないかと思います。難しいところですが、運営会社が主導で学会運営しますとスムーズな運営はできますが、参加者にとって学術集会が遠い存在になるのではないかと危惧されます。双方の良いところを取り入れ、これからの学術集会に反映させていきたいと思います。

#### 2. 学術集会の評価

学術集会ですから、参加者にどれだけ役に立つ take-home-message があったか、ということが重要になります。評価方法として、アンケート調査を実施することと、各会場の入場者数と議論の活発さを司会あるいはファシリテーターから聞き取ることにあります。アンケートは現在実施中でデータがありませんが、後者につきましては、各会場とも多くの参加者を得て活発な議論が行われたと報告を受けており、今回のプログラムの方向性は間違っていないと考えているところです。

もう一つ重要なことは、研究者間の交流です。活発な議論はセッション終了後のフロアやポスター会場でも行われていました。これがさらに共同研究や研修会の開催に発展することを期待しています。

#### 3. 学術企画・プログラムについて

第2回学術集会までは、17部会のポスターセッションと部会が担当する教育講演が主なプログラムでしたが、今回も同様に部会が中心のプログラムが組まれています。その上に学術企画・教育委員会が提案された企画をほぼすべてプログラムに組み込みました。当初、参加者が集まるか心配しましたが、学会1日目9時からセッションから多数の参加者を得、議論も活発に行われ、次年度のプログラム作成の参考になったのではないかと考えています。また、4つのワーキンググループによる企画も大変好評でした。新規の企画につきましては、プログラム集の挨拶に記載してありますのでそちらをご覧ください。

#### 4. 学術集会のテーマと今後

本学術集会のテーマは、これからのがん医療の本流となる「oncology と支持・緩和医療の統合」にむけて支持・緩和医療領域もエビデンスに基づいたものにならなければなりません。そのため、この領域における precision medicine、病態解明から臨床への応用についてワークショップ、シンポジウムを企画しました。そのメッセージは届いたと思いますが、教育・研究・診療すべてにおいて、この領域が未発達であることをあらためて感じられた方も多いと思います。年1回の集会ですが、みなさんが1年間の研究成果を発表・議論する中で、さらにこの領域が発展していくものと考えています。何かご意見がございましたら、遠慮なく学会事務局まで連絡ください。

最後に、すでに教室を離れた私が、この学術集会を無事終えることができたのは、伊藤、熊川、生駒の3女史、ローカルのプログラム委員、コングレ九州の方々の支援があったからであり、この場を借りて深謝します。



## 第3回学術集會事務局より

### 第3回日本がんサポーターティブケア学会学術集會を終えて

伊藤 敬美（第3回日本がんサポーターティブケア学会学術集會 事務局長）

2018年8月31日（金）～9月1日（土）に福岡国際会議場にて開催された第3回学術集會は心配された台風の影響もなく、事務局の予想を上回る参加をいただき無事終える事ができました。

会長がすでに大学の講座を離れていることもあり、事務局はCRCの伊藤、IT担当の熊川、JASCC事務総括の生駒の3人、少数精鋭で臨みましたが、会長を含めWindows95くらいの古さであり、すぐに対応できないこともありました。

ご協力をいただきました皆様方にこの紙面を借りてお礼申し上げます。

学術集會のテーマは「がん治療と支持・緩和医療の統合を目指して」－エビデンスに基づいたがんサポーターティブケア－とし、17部会のポスターセッションに212題の演題登録を頂きました。

ほかに教育セッション、症例検討会、ワークショップ、パネルディスカッション、口内炎実習ならびに日本がん口腔支持療法学会（JAOSCC）とJASCCとの合同シンポジウム等の8つの企画があり、やや盛沢山かと心配しましたが、会場は質疑応答もあり活発に議論が交わされました。その様子に関係者一同胸を撫で下ろしたところでした。

福岡の医師、看護師、薬剤師で構成されたローカルプログラム委員の先生方には17部会のカテゴリーに入らない演題の査読、ポスター発表でのファシリテーター、ディスカッサントの役を担い、さらに空いている時間はタイムキーパーや照明係、受付といったお仕事もお願いしました。おかげさまで会場運営がスムーズに運び、心からありがたく思っております。また田村会長がかかわってきた臨床研究グループの先生方、すでに現役を退官された先生方にも参加頂き胸が熱くなりました。

運営、会場の広さ、企画内容等に至らぬところがあったかと思いますが、参加された皆様には忌憚のないご意見をいただければと思います。今後とも日本がんサポーターティブケア学会が発展していきますように、暖かい目で見守って頂きますようお願いいたします。

#### 編集後記

ニュースレター第3号を発刊いたしました。今年の第三回日本がんサポーターティブケア学会学術集會は、田村和夫理事長のホームグラウンドである福岡の地で開催されました。演題数は年々加速度的に増加し、誕生して間もない学会の学術集會とは思えないほど、各施設からは最新のサポーターティブケアが報告され、活発な議論がなされました。各部会からは部会長を中心に研究報告が行われ、部会間で大変良い刺激になったことと思います。また、新たなワーキンググループが立ち上がり、JASCCは患者ファーストの学会としてますます成長しています。次回の学術集會は、みちのく青森で開催されます。各施設からの多くの発表をお願いいたします。ニュースレターも発刊間もないことから、会員の皆様からの声を募集しております。お気づきの点、メッセージなどございましたら、事務局までご連絡ください。最後に、ニュースレターにご寄稿いただきました各位には心より感謝申し上げます。（広報・渉外委員会）